



化学部門教員と大学院生らが教育支援センター「くすの実」で 理科実験教室を実施

【概要】

令和7年7月11日(金)に、不登校支援機関の教育支援センター「くすの実」にて理工学部 長田 聡史 教授と理工学科の学部生、先進健康科学研究科(理工系)の大学院生らが理科実験教室を実施しました。

【本文】

理科実験教室支援活動は、佐賀市教育委員会の不登校支援機関である教育支援センター「くすの実」の要請により、理科への興味をきっかけに子どもたちの就学意欲の芽生えを目的として行っています。

令和7年度第3回は7月11日(金)に理工学部化学部門 長田 聡史 教授が先進健康科学研究科(理工系)の大学院生および理工学部理工学科生命化学コースの学部生とともに、「キラキラスノードームを作ろう!」と題して、試験管内での結晶化実験を行いました。

この実験は、暑い夏に冬を連想させる内容で涼しさを感じてもらおうと、大学生たちが企画したものです。溶解度や再結晶は、小・中学校の理科の学習内容であり、食塩やミョウバンを使った実験が一般的です。この日も、まずは基本的な内容として、食塩とミョウバンを使った実験を行いました。その後、小・中学校ではあまり扱われない試薬を用い、試験管の中に雪に見立てた結晶を降らせる実験を行いました。試験管内で塩化アンモニウムをお湯に溶かし、室温で静置すると、冷えて析出した白い雪のような結晶が舞い降りていきます。その美しい様子を、子どもたちは真剣なまなざしで観察していました。

また、変わり種の実験として、ヨウ化カリウム溶液と硝酸鉛溶液を調製し、それらを混合すると、キラキラと金色に輝くヨウ化鉛の結晶が現れ、ゆっくりと沈んでいく様子が見られました。子どもたちはその美しい変化に興味深く見入っていました。参加した子どもたちの熱心な観察に触れ、ボランティアの大学生たちも、改めて「観察することの大切さ」に気づかされ、初心に立ち返る思いを抱いたようです。



「理科実験教室」の様子